Reflection

Ways to End Public Art Relight Project 1: Reflection 省察

目次

- 04 Introduction なぜ「Ways to End Public Art」か/菊池宏子
- 06 Overview Relight Project のこれまで
- 10 Column 「作品の父」が見た Relight Project / 宮島達男
- 12 Programs 「再点灯」を巡る活動の記録 1. Relight Committee
- Relight Days
 Relight Session
- 25 Column 消えるものと、灯しつづけるもの/長嶋りかこ
- Looking Back
 Relight Project を終えて
 ことの始まりは一通のメールからだった/菊池宏子
 時代との呼応、柔軟な変化/林曉甫
 それは変化し、関係を結び、永遠に続く/森司

なぜ「Ways to End Public Art」か

菊池宏子

この本は、私たちが歩んできたひとつの物語であり、プロジェクトのアーカイブでもある。

実態の見えにくい、普遍的な活動の本質は体験自体にあり、なかなか言葉や写真だけでは伝わりきらないものがある。しかし、それをあえて「残す」という行為に至ったのは、自らの活動を少しでも客観的な視点から評価する大切な機会だと思ったことにある。

Relight Project には、私たちの体験や記憶にしかない多くの無形の資産がある。しかしそれをどう世に送り出し、形や言葉として残すか?自分たちは、何にこだわり、プロセス重視で進めてきたのか?東日本大震災後の日本に生きる私たちが、アートを介してすべきことはなにか?

東日本大震災発生から2日後の2011年3月13日に、犠牲者そして被害者への鎮魂の意を込め、アーティスト宮島達男は自身の作品であるパブリックアート『Counter Void - 光の壁 - 』の灯りを落とし、数字の鼓動は止まった。それから5年という長い年月の間、"光の壁"は、ただの巨大な壁、構造物となった。

本書に冠した「Ways to End Public Art」というタイトルには、「パブリックアートが終わる道、終わらせる方法」、または「パブリックアートという概念、観念、思考、歴史を終えるという道、方向、方法、道のり、選択」と言った意味が込められている。

とはいえ、パブリックアートの撲滅や後退を意味しているのではない。表現形態のひとつでもあるパブリックアートの概念、また言葉が持つ意味や文化を存続するために考えるべきことを再整理する必要性を投げかけたいと、このプロジェクトを通じて感じたからだ。Relight Project は、もともと別の目的・意図で制作された既存のパブリックアート作品を「再建」するところから始まったという経緯もあり、この論議を組み込みながら展開する役割も担ってきた。

また、このタイトルが意図するところは、プロジェクトに関わり続けた私たち自身が持つパブリックアートに対する問いかけであり、Relight Project が歩んできた体験そのものでもある。

ただの壁:光のない『Counter Void』の意味するところ

もともと宮島は作品に「通りすがりに見る人々によって、その人々が感じ、考えることによってのみ完成し続けられるだろう」と願いを込めていた。しかし、その関係を築くきっかけがどこまであったかは不明瞭であり、また、振り返ると、再点灯という話が持ち上がるまでは、このパブリックアートが、アーティストの意思のもと消されていた事実を知る者はほとんどいなかったかもしれない。当然のことながら消灯前の記憶は薄れ、キャプションに刻まれた「証拠」以外は、本来あるべき姿が存在していなかった。これではまるで「参拝客のいない表現の墓場」のようだ、そんなことを思ったのを覚えている。

同様の問題は『Counter Void』に限らない。街を歩くと遭遇するパブリックアートの中には、誰からも気づかれず、なんとなくその街の背景になりながらひっそりと佇んでいる作品も少なくない。また長年の強い日差し、雨や雪に晒されて、みすぼらしく汚れきった作品たちも、申し訳なさそうに存在している。当然、誰かの意思で、良かれと思い設置されたはずだが、作品たちは、誰からも目を向けられない「表現の墓場化」していると感じざるを得ない。その中でも特に、プロップアート(Plop Art)と呼ばれる、景観や日常生活、作品の設置環境を考慮せず、公共の場にボトンと落とされたようなアート作品がまだまだ多く見受けられる。

先駆的であったパブリックアート(公共芸術)を導入したころと比べても、未だに法的・管理システム、土 地所有者の道徳的観念、また公共空間の使用についての評価基準や作品選考含む相対的な判断の方法・仕組 みなどがそれほど大きくは変わっていないことが原因のひとつなのかもしれない。Relight Project を実装する中で、パブリックアート周辺のインフラなどが要因となり、当初の計画や意図通りには、物事が進められないというジレンマにも直面した。このような状況を取り巻く環境の変化が、今のアートプロジェクトの現場にも多大な影響を与えていると思う。

古くなったパブリックアートを壊すことや放置することなく、モノに宿る過去の記憶を、誰がどう生かし続けるか? それを考え、実践する Relight Project の考え方は、古民家のリノベーションのそれに近いのかもしれない。時代の流れと共に、本来の目的・用途を全うした時、誰かが譲り受け、それらに込められた魂を引き継ぐことで文化は継承する。結果、アートが生き続けるのであればそれで良いのではないだろうか。

オリジナルのレガシーを尊重し、名を残すことも大切かもしれないが、特別な権威を誇示するアーティスト資本主義的な発想から抜け出すことで、よりパブリックアートという文化が継続し成熟する。どのような人が創ったかというよりも、作品を通じて何を伝えたいのか? それが誰のためなのか? もう一度、パブリックアートという言葉にある意味や思考から、パブリックという日常空間を構成する要因の一つとして、アートの存在意義を抜本的に問い直す必要があるのではないかと思う。

パブリックアートの思考を終える選択

思い返してみると、プロジェクト発足当初は、クラウドファンディングを通じて、新たなメッセージが込められたパブリックアートを再建・復旧することをひとつの目的としていた。そのプロセスによって、作品が持つ思いを再度届け、より多くの人たちとの共感によって作品自体が生き返る。ただ、それでは作品の補修・保存、メンテナンスの域を超えてはいない。参加・賛同を促す活動ではありつつも、当時はまだ、パブリックアートの思考同路からは、抜けきれていなかったと思う。

その後、さまざまな要因を検討しながらも、Relight Project の思いに賛同した有志と共に、プロセスの舵取りをしてきた。そうした流れの中、目的にコミットし、その思いを行動に移す「Relight Committee」という集団が必然的に形成されたことで、プロジェクト自体が市民参加型・市民主導のアートプロジェクトへと変容したほか、年に一度、3日間に渡って『Counter Void』を再点灯する「Relight Days」は、当プロジェクトを象徴するアクションへと昇華。社会的大変動となった震災を振り返る機会の創出だけでなく、ひとりの人間として、残りの362日間、何に意識を向け、どう社会と向き合い、行動するかを考えることで、自分なりの問いと気づきを見出すことが基幹となった。

さらに、プロジェクト自体の方向性のみならず、Relight Project をアートプロジェクトという領域の中でコンテクスト化するにあたり、この実態の見えにくい活動の価値、新たな評価、アーカイブ方法など、パブリック(コモンズ、公共)という場を活用・借用するアートのあり方についても、議論を重ねてきた。

このような軌道修正が起こったからこそ、パブリックアートを生かす方法が見えてきたのかもしれない。その最大の理由は、芸術的観点からのみ理想像を見出していないことにある。特に都市部において、アート作品という名を借りたパブリック・マスターベーションのような自己満足型の表現への限界を感じている中、常に現状に対して問題意識を持ちながら、自らに多くの問いかけをしてきたこの3年でより明確になったのは、「社会彫刻」という言葉が指し示す意味を、今の視点で捉え直すことの重要性だ。例えば「Relight Committee」では、模範的な人材育成・学びのスキームを考えることで、今までは作品というものの「傍観者」だった人が、「実践者」となる。社会彫刻的概念の起点、構造を応用することで、地域の中に埋もれる市民の潜在的な力を、あたかも彫刻のように可視化することができる。

また、前提として宮島達男というひとりの社会彫刻家が、Relight Project のメンバーとして関わり続けながら、作品を創ったアーティストとして行動してくれたことの意味も大きい。パブリックアートに付随する社会課題、問題意識を共有し、作者というエゴ的な理由ではなく、常に権威ある者としてできることを念頭に、プロジェクトのために動いてくれた。

パブリックアートを知ることが終わりを導く原動力

20年以上前になるが、アーティストのスザンヌ・レイシーは、自身が編集に関わった『Mapping the Terrain: New Genre Public Art (1994)』を出版した。1960年代から1990年ごろのパブリックアートについて、アーティスト、キュレーター、研究者などがそれぞれの立場から意見した内容をまとめた本である。欧米では、パブリックアートを実践する者たちに多大な影響を及ぼした一冊だが、日本語に翻訳されていないため、日本におけるパブリックアート、その後の特に地域参加を重んじるアートプロジェクトへの編成の中で、触れられる機会はあまりなかった

同書で、同時代的な社会的問題解決を意図する分野、また従来のパブリックアートに対する批評性を含む「新たなジャンルのパブリックアート」という考え方が提唱された結果、「公共の場の活用」という物理的な理由が主体にあったパブリックアートは、「エンゲージメントを基盤とし、多様化された聴衆に関与する日常生活にある争点 (issue) を、伝統的かつ非伝統的なメディアによって、情報伝達し (communicate)、お互いに影響し合う (interact) 視覚芸術」であるという考え方がより認知され、表現方法と意図が抜本的に変化した。パブリックアートの存在意義から、媒介者すべてに利益をもたらすようなコミュニティづくりに到るまで、社会的相互調整の役割の重要性を示したことで、パブリックで展開するアートがますます多様化したのである。

これは、あくまでもひとつの例に過ぎないが、自分たちの活動にロジックを当てはめることは大切だと思っている。

最後に

Relight Project にとって『Counter Void』は、作品に込められたテーマ「人間の生と死」を主題にし、自分自身、そして社会に対し問うこと、そして気づきの創成を促す触媒であった。

意志を持って始動させ、意志を持って終了させる。その行為が「Relight Days」という3日間の Ritual (慣習的な行事) となり、それを社会彫刻家集団「Relight Committee」が形づけた。

3月の寒さの中、毎回違った光景があった。3年目を迎える今、述べ9日間という限られた時間の中で、 作品という大きな鏡に映り込む自分を見つめた時、人々は何を感じ、われわれは何を伝えることができた のだろう。

物事は、常に始まりと終わりの繰り返しでもある。やり残したことも多くある。全てが本意ではない。ただし、どんな理由があるにせよ、節目というひとつの終わりを迎えた今、ここで得たことを必ず次への活動への 糧にしたい。



Photo: Shinya Kiguro

菊池宏子

(アーティスト、NPO 法人インビジブル クリエイティブディ レクター)

東京生まれ。ボストン大学芸術学部彫刻科卒、米国タフツ大学大学院博士前期課程修了。在学中よりアートの社会における役割やアートと日常・社会との関係について研究・実践を続け、美術館・文化施設、まちづくり NPO、アートプロジェクトにて、コミュニティ・エンゲージメント戦略・開発に従事するほか、アート・文化の役割・機能を生かした地域再生事業、ソーシャリーエンゲージドアートにも携わる。その他武蔵野美術大学、立教大学兼任講師、一般財団法人 World In Asia 理事なども務める。

Relight Project のこれまで

Relight Project はどこから生まれ、どこへ向かっていったのか。プロジェクトの運営を担う NPO 法人インビジブルの林曉甫と菊池宏子、室内直美にインタビューを実施。

彼らが何を考えてプロジェクトを推進してきたか、その概観をまとめたほか、「Chronology」として活動の大まかな流れを編年体で紹介する。

《聞き手》南澤悠佳

震災から始まった

2011年3月11日14時46分、宮城県牡鹿半島の東南東沖130km を震源地とする東日本大震災が発生。それから2日後の3月13日、六本木ヒルズ内にある現代美術家・宮島達男 1 のパブリックアート『Counter Void – 光の壁 – 2 』は、宮島自身の意向により点灯を停止した。

しかし、時間の経過とともに再点灯を希望する声が上がってきたことで、震災から2年を経た2013年に再点灯について考察する一連の「光の蘇生³」プロジェクトがスタート。 当時フリーランスで活動していた林曉甫もプロジェクトに参加し、東日本大震災を機にアメリカから帰国したアーティストの菊池宏子も同プロジェクトの勉強会にゲストとして

その後、林と菊池が抱いていた「アートを現代社会や企業、地域が抱える課題解決の糸口にしたい」という思いと、光の蘇生プロジェクトの方向性が一致したことで、2人が中心となって設立した NPO 法人インビジブルが2015年よりプロジェクトの運営を担うことになり、光の蘇生プロジェクトはその名称を Relight Project に変更。アートを通じて市民間の対話や参加を促し、社会になんらかの変革をもたらそうとする「ソーシャリー・エンゲイジド・アート (SEA) 4」の思想を取り入れ、未来の生き方や人間のあり方を考えるプラットフォームを目指すアートプロジェクトとして活動を始めた。

プロジェクト始動

こうして生まれた Relight Project がキックオフイベントとして行ったのが「六本木アートナイト2015」でのワークショップ「3.11 が■■ ている。⁵」である。

当時、『Counter Void』はすでに消灯していたため、そこに作品があることを知らない人が多く、なぜ消灯されたのかを理解している人も少なかった。こうした状況を鑑み、道行く人に対し『Counter Void』の存在を認識させるとともに、消灯のきっかけである「3.11」を可視化。東日本大震災から4年が経ち、時間の経過とともに参加者一人ひとりの心の中で起こった変化を改めて見つめ直してもらうためのワークショップであった。

同ワークショップをきっかけに、Relight Project は本格的に始動する。2015年7月

- 1 現代美術家。1957年東京生まれ。1980年代半ばから LED を用いたデジタルカウンターの作品を発表。以来、国内外で数多くの展覧会を開催する。『Counter Void 光の壁 -』の作者であり、Relight Project のメンバー。自身の作品を用いた Relight Project の運営をインビジブルに託していることについて、宮島は「Counter Void は嫁に出した娘のよう」と話している。
- 2 2003年に六本木ヒルズ内に設置された宮島達男による人間の「生と死」をテーマにしたパブリック・アート作品。全長50m、高さ5mの壁に9から1の数字が表示され、カウントダウンを繰り返す。2011年3月11日の東日本大震災の2日後に犠牲者への鎮魂と節電のために消灯され、2016年3月11日に5年ぶ
- 3 2013年からスタートした、「Counter Void」を再点灯するか 否かを考察する Tokyo Art Research Lab 【プロジェクト構 想プログラムー「光の蘇生」プロジェクトを構想する】、およ び2014年から始まり、3.11以後の日本社会にふさわしいか たちでの再点灯の方法が検討された東京アートポイント計画 《「光の蘇生」プロジェクト》を指す。プロジェクトの方向性を探 るため、さまざまな分野の人を招いた勉強会を中心に活動を 行った。
- 4 閉じたアートの世界から現実の世界へ積極的に関わり、人々 との対話や協働を行うことで地域や社会に能動的に関わり、 なんらかの社会変革(ソーシャル・チェンジ)を起こそうとす るアートのあり方、もしくはそうした活動の総称。
- 5 Relight Project で行った初のワークショップであり、六本木 アートナイト2015の出展作品。ワークシートの■■(ブランク) 部分に、参加者が3.11に対するそれぞれの想いや考えを白い ベンで書き込み、Web 上で公開した。「Relight Days 2016」 「Relight Days 2017」でも実施し、今までに総勢200名近い人 が参加した。

からは、プロジェクトに賛同し、方向性の舵取りという役割を担う有志の集団「Relight Committee (当初は「Relight Salon」として開催)」がスタート。2016年3月、5年ぶりに行われる『Counter Void』再点灯に至るまでの「道のり」をどう設計していくかなどについてディスカッションが重ねられた。同年9月には、アーティストやクリエイター、民間企業など、立場の異なる人が3.11以降におけるアートの役割を考察する「Relight Session」の第1回を開催。その後も継続的に開かれることとなる。

また、Relight Project にとってひとつの節目と言えるのが、毎年3月11日~13日の3日間に渡って行われる「Relight Days」である。このイベントは、期間限定で『Counter Void』を再点灯させることで、東日本大震災の体験を風化させず、今を生きる私たち一人ひとりが今一度生きることに向き合う機会をつくることを目的に行われている。

社会彫刻家の輩出をミッションに

このように Relight Committee \angle Relight Session \angle Relight Days \angle 、大きく3つの要素によって成り立っている Relight Project だが、中でも中心的な役割を担っているのが、社会彫刻家の輩出を目的とした市民大学、Relight Committee である。ここで使われる「社会彫刻家」とは、Relight Project 内で生み出された造語であり、ヨーゼフ・ボイス⁶が提唱した「社会彫刻⁷」の概念を現在の視点から捉え直し、「アートが持つ創造性や想像力を用いて、自らの生活や仕事に新たな価値をつくり続け、行動する人」を定義したもの。Relight Project では、さまざまな領域において社会彫刻家が増えることで、社会はより豊潤になっていくと考えているが、このコンセプトに至るまでには、紆余曲折があった。

2015年の発足当初、Relight Committee は「アートと社会について従来の定義や枠組みを超えた対話を重ね、具体的な行動につなげる人を育てる学びの場」という位置づけではあったものの、『Counter Void』の再点灯に対する舵取りの役割を担う側面が大きく、結果Relight Days の関連企画に対して多くの時間や思考が注がれていた。そのため、本来の狙いであった「対話」に十分な時間が取れず、「社会彫刻家」としての意識が芽生えにくいという課題が残った。

そもそも Relight Project に「教育」という観点が加えられたきっかけは、Relight Project の前身である光の蘇生プロジェクトにさかのぼる。同プロジェクトでは、「アートとは何か」「人間とは何か」「3.11後の社会とは何か」といった議題のもと、数々の勉強会が行われており、その場を通じて「光の学校」という構想が持ち上がっていた。ただ、「学校」が持つニュアンスには「誰か知識のある者が教え、参加者が学ぶ」という一種の上下関係の意味合いが含まれてしまう。そこで Relight Project では、「さまざまな知見を持つ者同士が協議をして何かを決めていく場所」という意味を込め、「Committee = 委員会」という組織体を取ることとなった。そうした当初の理念に立ち返り、2016年からは運営体制やプログラムの大幅な見直しを行い、市民大学らしい「学び」の仕組みを再検討。特に「対話」を中心としたプログラムを組み込み、集団で考える内容から個人が社会とどう向き合うかという方向への切り替えを行った

たとえば、2016年に実施した課題のひとつに「Relight Action」がある。これは受講生それぞれが社会彫刻家として『Counter Void』のコンセプトである「生と死」を受けた自らの「行動計画(Action Plan)」を表明し、実際にアクションを起こすというもの。結果、受講生たちはそれぞれの個性と専門分野を軸足としながら、そこにアートを介することで、これまでとは異なったテーマや領域に踏み込むこととなり、日常生活では起こしづらい行動を実行することにもつながった。

2015年から始まった Relight Committee。その受講生の数は3年間で30人余りに過ぎない。しかし、Relight Project を通じてアートの持つ可能性を知り、自らの領域を切り開く力を持った社会彫刻家の数は、確実に増えている。

- 6 1921年生まれのドイツの現代美術家。パフォーマンスアートの ほか、彫刻、インスタレーション、ドローイングなど数々の作品 を残す、総合芸術として「社会彫刻」や「拡張された芸術概念」 という独自の概念を打ち立て、彫刻やアートの概念を教育や 社会変革にまで拡張した。1986年没
- 7 ヨーゼフ・ボイスが提唱した概念。すべての人が創造力という 能力を持っており、どのような分野でも誰でもその能力を発 揮することで社会を変えることができる。すなわち誰でも社 会彫刻することができるし、しなければならない、という考 えのもと編み出された。

Tokyo Art Research Lab【プロジェクト構想プ ログラム - 「光の蘇生」プロジェクトを構想する】 スタート

7月11日の公開講座キックオフ「なぜ、芸術を蘇生するのか?」 を皮切りに、2014年3月までに計7回の公開講座を実施。哲学 者の鷲田清一氏やアートディレクターの北川フラム氏、青柳正 規文化庁長官(当時)など、毎回さまざまなゲストを招き、「光 の蘇生」プロジェクトのイメージを深めていった。



東京アートポイント計画【「光の蘇生」プロ ジェクト -《Counter Void》再生をめぐって】

『Counter Void』が3.11後の日本社会においてどのような姿で再生されるべきなのかについて言葉を交えた宮島達男と脳科学者の茂木健一郎氏によるトークイベント (4月19日)のほか、長嶋りかこや菊池宏子を招いた勉強 会を5回に渡って実施。後の Relight Project につながる アートプロジェクトの構想を練っていった。 4.1



東京アートポイント計画【Relight Project】

プロジェクト名称をそれまでの「光の蘇生」から「Relight Project」に改称。『Counter Void』の再点灯に関するプロ グラムの運営と人材育成を主眼に置いたプロジェクトとし

7.27

Relight Committee

2015 始動



2016 始動

7.29



2017 始動

3.11 - 3.13



Relight Days 2016 開催

3.11 - 3.13



2018 開催

2013

2014

2015

Relight Days

Relight Committee

2016

2017

2018

Relight Session



Relight Session Vol.1 開催

3.11 - 3.13



Relight Days 2017 開催

4.19



六本木アートナイト2014に参加

3.12



社会学者の開沼博氏によるガイドのもと、プロジェクトに 関わる16名を対象に福島県いわき市を中心としたスタ ディツアーを実施。

4.25 - 4.26



六本木アートナイト2015 に参加

「六本木アートナイト2015」のプログラムとして、「Counter Void」上でのインスタレーションやワークショップを実施(「リ ライトプロジェクト」キックオフ!)。また、六本木の街にある パブリックアートをモチーフにした看板を作品として制作し、 港区立桜坂公園に設置すると同時に、六本木のパブリックアート MAP を配布した (中崎透[Sign for public art」)。

3.13



Relight Project × MEDIA AMBITION TOKYO・Relight Session Vol.3「アート×社会 -見えないモノを想像する-」開催



Relight Project × MEDIA AMBITION TOKYO · Relight Session Vol.2 **「ソーシャリー・エンゲージド・アート:** 行動するおとこたち」開催

12.17



Relight Symposium 2017 「都市とアート/思考と実践」開催



『Counter Void - 光の壁 -』

「作品の父」が見た Relight Project

宮島達男

『Counter Void - 光の壁 -』は、テレビ朝日社屋を設計した槇総合 た。「『Counter Void』の光をもう一度点灯することで、消した意味 ることになりました。

通網は麻痺。電気は止まり、帰宅困難者が続出し、パニックが起こ す目的でプロジェクトを始めたのでした。 りました。そして、その夜からテレビやネット上で少しずつ被災地 の様子が伝えられるにつれ、その被害の甚大さ、悲惨さ、過酷さが 3年と活動していくうちに、再点灯そのものより、作品をとおして 判明してきました。 地震に続き、火災や津波で被害が広がり、膨大 人々が行動する、そのプロセスにこそ意味があり、人々の意識を変 な数の人々が亡くなられたのです。日本中の皆が暗澹たる思いに えていくものだ、と認識が変わり、名称も「Relight Project」に変え なり、言葉を失いました。

所の知り合いのお年寄りの家に行ってできるだけのお手伝いをさ のメンバーが、作品を巡って、勉強会を開いたり、議論をしたり、視 せていただきました。それから、ネット上に溢れる膨大な情報から、察旅行に行ったりして思考を深め、認識を新たにする様子を「作品 自分に今、できることを探し、サポートしていきました。私は1995 の父」としてうれしく見守っていました。 年の阪神大震災も知っていたので、現地にすぐにでも入りたい衝 動に駆られましたが、交通網が遮断しているのでそれも叶わず、自は、「Relight Committee」という「人材教育」に特化していく過程 宅にとどまっていました。テレビやネットで、福島の原発が被災しだったと思います。それまでは、東日本大震災の被災者への鎮魂の て停止した事実が告げられ、東京やその周辺では、次の日から真っ ため消灯された作品を、「再点灯するかしないか」という作品の取 暗になりました。夜でも、必要最小限度の灯しかつけなくなりまし 扱の話でした。しかし、メンバーの長嶋りかこによって提案された た。ネオンサインは消え、商店も、駅の構内も灯を落とされひっそ プロジェクト・コンセプト「『Counter Void』という作品を<光の学 りと静まり返っていました。電力が不足するので「節電」が声高に 校>」という場所としてとらえ、そこに集う人々の意識変革をテー 叫ばれていました。テレビからは一切の CM が消え、お笑いやバラ マにしたいと言った時、大きく開いたように感じました。 エティーなどは放送しなくなりました。私たちは、こんなにも真っ や規制を自主的に行っていたからです。

げ、了解をいただいた上で『Counter Void』の光を消しました。そ 強く思えました。 れから、1週間後、私は石巻に入り、泥かきのボランティアを2日間 ることは何でもやりました。

時のことを人々が少しずつ忘れかけていることに気づきました。り継がれることでしょう。 「あれほどの大惨事を風化させてはいけない」そんな思いで、NPO を立ち上げ、「光の蘇生」というアートプロジェクトを開始しまし 2018年3月

計画事務所とアート作品選定にあたった建畠晢さんの要請により や記憶を呼び覚まそう」と参加してくれた仲間と話しあいました。 構想し、2003年に完成。 夜の六本木に数字が輝き出しました。 情報 記憶の装置として、また鎮魂についてもう一度考えるために。 思い や人が過剰に行き交う都市「東京」の中心「六本木」で、あえて「生 出してほしかったのは、私たちが震災直後のあの真っ暗で静かな と死」という問題を提起した作品です。それにもかかわらず、おか 夜の中で、確かに人生観が変わったはずだったことです。価値観が げさまで、多くの人々に愛され、宮島達男の代表的作品に数えられ 真っさらになって「ちょっと考えなおそう」と誰もが思ったことな んです。私もそうだった。それがいつのまにか「ま、いいかぁ」と、 ところが、2011年3月11日、あの「東日本大震災」が起きました。 ズルズルと元通りの生活に逆戻りしている。「では、一体あの大震 ただごとではないと思いました。震源地から遠い東京でさえも交 災の経験は何だったのか」。だから、人々の心をもう一度揺り動か

そして、当初は、作品の再点灯のみを目指す活動でしたが、2年 ました。アーティストでもある私は、つねづね「作品は人々が使って 私は、揺れが収まった直後から、家族の安否を確認し、すぐに近 はじめて活きるもの」と考えていました。だから、Relight Project

そうしたプロジェクト活動の中で、大きくフェーズが変わったの

そして、その意識変革をさらに「社会彫刻家」という人間モデル 暗で静かな街を今まで経験したことはありませんでした。それは に展開し、ファシリテーション(教育)を行った菊池宏子や林曉甫ら 亡くなられた多くの人々への「鎮魂」として、皆、ごく自然に「節電」 NPO 法人インビジブルの存在はさらに大きいものでした。その成 果は、コミッティー参加者(一般の人々)が成長し変容したと言う 私も、自分にできる「行動」を考えていました。そんな時、 だけでなく、実際のアクションというカタチで、社会に影響を与え 『Counter Void』のことが頭をよぎりました。「この作品の光を落っる存在となったからです。このことは、具体的なアートの「力」を示 とそう。亡くなられた方々の冥福を祈り、鎮魂を捧げよう」そんな した一例であり、そのキッカケとなった作品の作者としてこれ以上 切実な願いからでした。早速、その想いをテレビ朝日の担当者に告 の喜びはないし、作品『Counter Void』を消灯した意味もあったと

アート作品は、美術館で保管され、お勉強する対象だけではない やらせていただいたほか、被災地支援の募金活動の応援など、でき はずです。今を生きる私たちが、作品を、困難な時代を生き抜くヒ ントや力となれるように使っていくことが、作品を本当に鑑賞す そうして、慌ただしく、震災後1年、2年と過ぎていき、「Counter るということではないでしょうか。その意味で、Relight Project は Void』は消えたままでした。ところが3年経ったころ、ふと、震災のアート作品を、人間が本当に活用したプロジェクトとして、永く語



宮島達男

1957年東京生まれ。1980年代半ばから LED を用いて1から9ま での数字を使ったデジタル・カウンターの作品を発表。以来、国 内外で数多くの展覧会を開催し、世界30カ国250カ所以上で発表している。1996年より「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を、2009 年より「PEACE SHADOW PROJECT」を推進。2003年に六 本木ヒルズ内のテレビ朝日外壁に『Counter Void - 光の壁 -』を

「再点灯」を巡る活動の記録

未来の生き方や人間のあり方を考えるプラットフォームを目指すアートプロジェクトとして、2015年4月に立ち上がって以降、3年間に渡り取り組みを続けてきた Relight Project。

その中核を成す3つのプログラム、

- 1. Relight Committee
- 2. Relight Days
- 3. Relight Session
- の活動を写真とともに振り返る。

1. Relight Committee

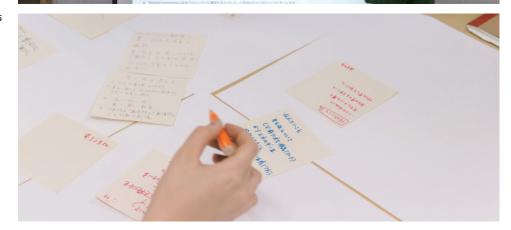
2015











¹ 2015.7.27 + 8.31 Relight Salon

「光の蘇生」プロジェクトの参加者、「六本木アートナイト 2015」のボランティアを中心に、5年ぶりとなる『Counter Void』再点灯に至るまでの「道のり」をどのように設計してい くかを議論。

2 2015.9.28

Relight Committee 2015 Vol. 1

Relight Salon を「Relight Committee」と名称変更。参加者一人ひとりが「Relight Days」のイベント企画・運営を題材に、それぞれの観点から3.11後の社会について考え、アクションを起こすことを目指し、毎月一度の定例会議を軸に活動に取

3 2015.10.26

Relight Committee 2015 Vol. 2

Relight Committee のメンバーに対し、Relight Days に向けた方向性の周知と目的の確認を実施。これまでの振り返りや各自の企画案の発表、今後のプログラム流れについて共有を行った。

4 2015.11.30

Relight Committee 2015 Vol. 3

各々の企画を Relight Days の概要・文脈にのせ、現実的な企画案を考えることなどを目的に、Relight Days について進捗の報告と方向性のプレゼンや各自の企画案紹介などを実施。

5 2015.12.21

Relight Committee 2015 Vol. 4

Relight Days に向け、運営の円滑化を目的に進捗報告や アーカイブ作業の概要共有、当日プログラムの企画会議など を実施。

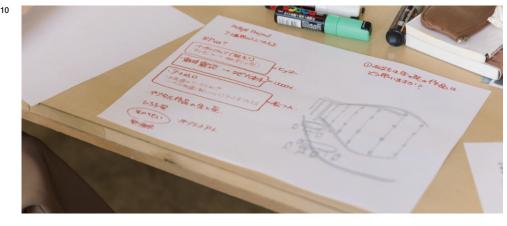
12





2016





6 2016.1.25

Relight Committee 2015 Vol. 5

Relight Days に向けて、各々のプログラム企画の最終案を固めるべく、進捗の共有やメンバーの具体案の発表、最終的に開催するプログラムの絞り込みなどを実施。

7 2016.2.29

Relight Committee 2015 Vol. 6

プロジェクトの最終的なリアリティチェックや、予算面などブラッシュアップを実施、企画内容や Relight Days 全体の流れの最終確認を行った。

8 2016.3.28

Relight Committee 2015 Vol. 7

「Powwow! - Relight Project を振り返る -」と題し、外部からも参加者を募って公開形式で開催。メンバー自身が当日の内容を企画し、7月からの活動の紹介や Relight Days 2016の各プログラムの報告を行った。

9 2016.7.3

Relight Committee 2016 Vol. 1

新たに募集をかけ、集まった Relight Committee 2016 メン バーに、プロジェクトについて説明。 現代アートにおける社会 への Action の事例紹介やディスカッションなどを行った。

10 2016.8.7

Relight Committee 2016 Vol. 2

「Relight Project とは?」を説明するワークショップや、アメリカの現代アートがフェミニズム運動にどのように関わってきたかを紹介するレクチャーのほか、東京都港区立笄小学校の図工教諭、江原貴美子先生を招き社会彫刻家についての議論を実施。











¹¹ 2016.9.10

Relight Committee 2016 Vol. 3

インビジブルの菊池宏子と林曉甫によるレクチャー「足元から生まれる社会:地域コミュニティへのアートの活用と接続」、「自らが思うアート」を探すフィールドワークなどを実施。

12 2016.10.2

Relight Committee 2016 Vol. 4

Relight Committee 2015メンバーによる、Relight Days 2016 と向き合う座談会を実施。Relight Days 2017に向けて個人 の企画アイデアを考え、発表した。

¹³ 2016.11.12

Relight Committee 2016 Vol. 5

Relight Days 2017へ向けた個人の企画プレゼンを実施。アーツカウンシル東京の森司により、「社会彫刻家」としての自身の背景や現在の活動、アートやアートプロジェクトに対する思いが話されたほか、「芸術に規制は必要か、不要か」についてのディベートを行った。

14 2016.12.24

Relight Committee 2016 Vol. 6

Relight Days 2017へ向け、ブラッシュアップしたメンバー 各々の企画プレゼンを実施。

15 2017.1.21

Relight Committee 2016 Vol. 7

前回に引き続き、Relight Days 2017へ向けたメンバーの企画のプレゼン、および宮島達男による近年の活動についてのトークを実施。

14

²¹ 2017.10.14

22 2017.11.18

Relight Committee 2017 Vol. 4

「観光」をテーマに、「日常を異化する」ことを観光だととらえ、観光地でのアートプロジェクトの事例紹介や、湯島、末広町、秋葉原エリアを使い、与えられた「観光」にまつわるインストラクションを実行するワークショップを実施。





¹⁷ 2017.3.18

¹⁶ 2017.2.18

Relight Committee 2016 Vol. 9

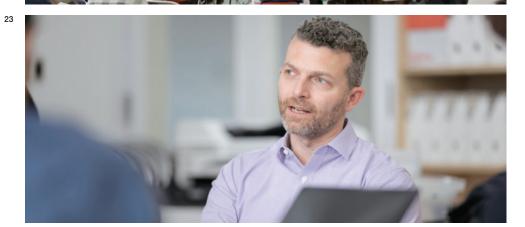
Relight Committee 2016 Vol. 8

Relight Committee 2016メンバーが主体となり、Relight Committee 2016の活動についてと自身の Action について 振り返った。 宮島達男、森司らも参加。

前回に引き続き、Relight Days 2017へ向けたメンバーの企画 のプレゼン、および Relight Days 2017の詳細についての共 有を実施。個人としての Action が導き出せないメンバーに対 して議論が紛糾した。







2017

Programs







18 2017.7.29

Relight Committee 2017 Vol. 1

新たに公募し集まった Relight Committee 2017メンバーに よる自己紹介や、宮島達男による自身のこれまでの活動につ いてのトークを実施。

19 2017.8.26

Relight Committee 2017 Vol. 2

「身体・ボディ」をテーマに、粘土を使っての裸体デッサンや、 身体・ボディにまつわるアートパフォーマンス、社会へ向けた アクションの事例について座学で紹介。

20 2017.9.16

Relight Committee 2017 Vol. 3

Relight Project とは? Relight Committee とは? を説明するワークショップを実施したほか、「老い・経年」をテーマに、メンバーで老い・経年への観念や体験をディスカッション。



2. Relight Days

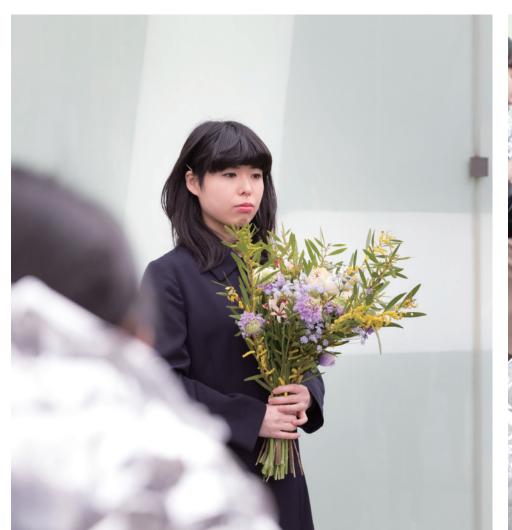
2016















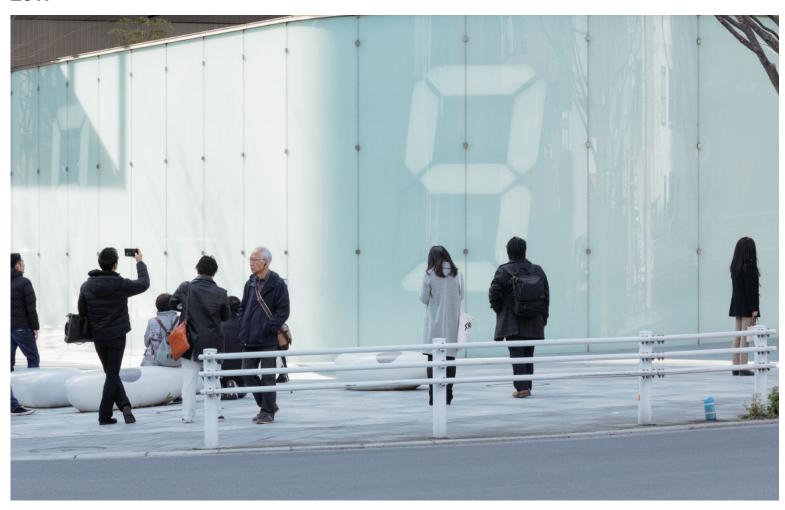




2016.3.11 - 3.13

六本木けやき坂『Counter Void』前で Relight Days 2016 を 実施 3日間に渡り、『Counter Void』の再点灯を行ったほか、 Relight Committee 2015 によるプログラムを昼・夜 2 回に分けて 展開した。

18

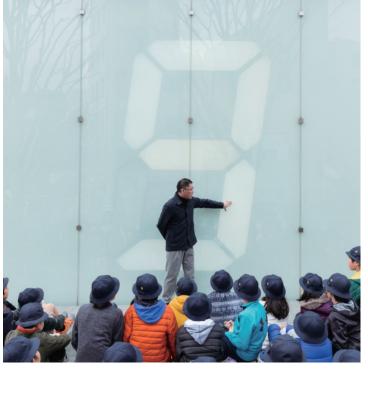












2017.3.11 - 3.13

「Counter Void」前で3日間に渡って再点灯を実施。「Counter Counter」を設置し、周辺も含めて Relight Committee 2016 が アクションを実行したほか、「3.11 が でいる。」のワークショップを行った。

20

Progra

3. Relight Session

2015.9.15





2016.1.28



Relight Session Vol. 1

『Counter Void』作者の宮島達男、アーツカウンシル東京の森司、 そして2015年度から Relight Project の運営事務局を担う NPO 法人インビジブルの林曉甫、菊池宏子がプロジェクトの今後の展開 についてディスカッションを実施。



ライゾマティクス代表取締役社長の齋藤精一氏、ジャーナリストの津田大介氏、宮島達男をパネリストに、トークセッションを開催。ソーシャリー・エンゲージド・アートを取り上げ、各人が活動分野の枠を超えて、アートを活用して行動を示すことで社会の変革を試み、3.11以降の社会の中で、具体的にアートを活用した活動や、これからのアートやアートプロジェクトの役割・あり方について議論を展開(MEDIA AMBITION TOKYO との共同開催)。



2016.3.13





Relight Project × MEDIA AMBITION TOKYO Relight Session Vol.3「アート×社会-見えないモノ を想像する-」

起業家で情報学研究者のドミニク・チェン氏を招き、宮島達男と [Counter Void] の作品テーマである [生と死] について情報化社 会で生きる我々はどのように向き合い、未来を考えていくべきか についてのトークセッションを、Relight Days 2016最終日に実施。

22



Relight Symposium 2017「都市とアート/ 思考と実践」

アリゾナ州立ヘルベルガーデザイン&アート大学ディレクターの ジェイソン・シューバック氏とアート・コーディネーターの帆足亜 紀氏による基調請演、および宮島達男、帆足亜紀氏、菊池宏子 (イ ンビジブル)、ジェイソン・シューバック氏によるパネルディスカッション「都市におけるアートの社会的価値を考察する」を開催。

消えるものと、 灯しつづけるもの

長嶋りかこ

私のところに久しぶりに宮島さんが会いに来てくれたのは、震災 とアクションを重ね、それぞれに灯った気づきの光を絶やさずに、

宮島さんの作品は常に人間の生と死を考えさせるが、 していない。 『Counter Void』は人の生死だけでなく都市の生死も体現し [3.11が■■ている。」ということばは、震災が各々にとって一 時間を過ごしたように、宮島さんもまた作者自らの意思によ け止めているのかを自身が言葉にすることで震災とは何かをあ

たいけどそれは作者が考えるべきなのではないかというお話をされば実現できなかった。 せていただいた気がする。けれど宮島さんはそんな私の反応も予 ヨーゼフ・ボイスは自身が生み出した「社会彫刻」という概念に 測されていて、作者主導のそれでは20世紀のアートのありかたと 対して、以下のような言葉を残している。 同じだとおっしゃった

震災から時間が経ち、自然への畏怖の念を持ったかのように 覚えた世の中は、予想以上に何事もなかったような日常を取り戻 し、ただただ時間が震災前に戻ってしまったようで、いまだ復興の 必要な日常を目の前にしている被災地の人々が存在することも、 すっかり忘却されてしまったように見えた。東北の復興の一部が 地元に根ざしたカタチではなく強制的で一辺倒な統率と分断を強 いられ、結局20世紀的な効率のもとに行なわれてしまっているこ とも、忘却と同様に巻き戻されるような感覚になる。作者ひとり のトップダウンにより異物を街に置くことがこれまでのパブリッ クアートであったが、これからはボトムアップで市民から立ち上 がっていく声によりカタチになるパブリックアートがあってもい いはずだという宮島さんの意見に共感を覚えたのは、そういった 世の中の流れへの自分自身の疑問と、これからのアートのあり方 への宮島さんの問いが重なり、このプロジェクトの意義を感じた

だった。彼らによる Relight Project は、幾度となく市民との対話 てもそれをかたちづくっていくことでしか、変革は起こらない。

からしばらく経ち東京の街が普通の日常を取り戻していたころ。 各々が自らの問いをカタチにして発信し続けた。彼らは、描いてい かつて核兵器への問いのため宮島さんと一緒に作ったアートプ たさまざまな計画のいくつかが実行できなかったことを悔やんで ロジェクト「PEACE SHADOW PROJECT」のように『Counter もいるけれど、私は彼らの継続と実行のしなやかさと足腰の強さ Void』をどう再生していくべきかを考えてみないかとのお誘い に感嘆している。主体となり人々をファシリテートし多様で流動的 で豊かな中身をつくっていくことに、自分の能力はまったく機能

ていた。しかし突然起こった東日本大震災を機に、あれほど狂 辺倒ではないことを可視化する試みとして企てたのもので、すべ い咲きしていた街が黙祷し目の前の日常を慈しむかのような てが物凄いスピードで消費される現代にいま人々は震災をどう受 り鎮魂の意を込め作品を消灯させ、街に賑やかさが戻ってもらためて認識すると同時に、各々がおかれた状況とその移ろいゆ なお続いた黙祷によりあのパブリックアートの存在は消えた く様を俯瞰して見るという目論みだった。インビジブルと Relight Committee によって実行された六本木アートナイトや小学校の 私はまずその再生のお誘いに正直驚き、確かあの時はやってみ ワークショップへの展開は、彼らのその主体的な足腰の強さがなけ

はどんな人間も画家になったり、あるいはモーツァルト のようになったりすることを意味するのではありませ ん。どんな人間も社会の変革のために働けるという意味 です。(…)誰もが、自分自身の考えによって、本当の意 味で自らの創造力を共同体に提供することができるので す。(…)したがって、私の『拡大された芸術概念』というの は、非常に実践的なもので、どんな人間にとっても、どん な活動にとっても重要なものです。(…)我々が思考する ことによって、社会あるいは人間の肉体を、新しい、大い なる彫刻として作っていくことを、私は考えております。

(水戸芸術館現代美術センター編『BEUYS IN JAPAN ヨーゼフ・ボイス よみがえる革命』(フィルムアート社 2010年) P. 148)

六本木の狂気めいた光と殺気立った闇の双方の鼓動を、あの煌々 3.11によって得られた気づきが徐々に消えていく中で、と光る巨大なカウンターから感じることはできなくなった。あの 『Counter Void』は人々にとっての気づきの光として再生するこ パブリックアートは死んだと言えるのだろうか。もしかしたらトッ とはできないだろうか。3.11後の社会ってなんだ。アートとはな プダウン型としては死んだと言うのかもしれない。しかし Relight んだ。人間とはなんだ。これからの未来がどういったものであっ Project によって人々に灯った光や、コミッティによって灯され てほしいのか、自分たちの手の届く範囲のことから届かない未 た光は、恐らくすぐに消えるようなものではない。それぞれの心 来のことまで、ていねいに考える時間と行動しカタチにする「場」 にじっと小さな炎を保ち続けるのかもしれないし、誰かの心を灯 に、『Counter Void』はなれないだろうか。そんな考えで、プラッ す光となるのかもしれないし、遠い未来にいつか爆発するのかも トフォームとしての『光の学校『を構想し、この作品の光の再生 しれず、このありようは、ボトムアップ型のパブリックアートがも と、未来を書き換えていく行為全体を表し「Relight Project」と たらすものがなんなのかという問いのひとつの答えでもあるの だと思う。

しかし私にできたことはこのように本当にわずかなことであ 社会の変革のために、理想を掲げるだけでなく、実行してかた る。このような私の机上の空論を、地に足の着いたカタチで実現さ ちづくっていくこと。それはまさに本来あるべき「デザイン」とい せたのは、インビジブルの菊池宏子氏と林曉甫氏による秀逸なファ う行為のことでもあり、この言葉はむしろデザイナーに必要な言葉 シリテート、そして市民参加による「Relight Committee」の存在 なのではないかとも感じる。 机上の空論ではなく、どんなに小さく



長嶋りかこ

1980年生まれ。武蔵野美術大学卒。2014年から village® 主宰。 既 存の視点への問いや価値転換への気付きへの貢献をめざし、対象 の思想の仲介となり、VI計画、エディトリアルデザイン、サイン計画などの知覚情報をデザインする。また人間と自然の関係や、自 然物としての人間本来の心のありようをテーマにしさまざまな媒 体で提示する"Human_Nature"という活動を不定期で展開する。これまでの仕事に、「札幌国際芸術祭2014"都市と自然"」、「東北 ユースオーケストラ | 「アニッシュカプーアの崩壊概論 | 建築家 集団 ASSEMBLE の展覧会 [共同体の幻想と未来]、剛之、 集団 ASSEMBLE の展覧会 [共同体の幻想と未来]、剛之、 私は、どんな人間も芸術家であると申しましたが、それ 島達男氏との共作[PEACE SHADOW PROJECT] などがある。

Relight Project を終えて

2013年に「光の蘇生 | プロジェクトとして萌芽。 2015年の 春以降はその名を変え、約5年間に渡って続けられてき た Relight Project。2018年3月でその活動に幕を閉じる 今、プロジェクトの運営を行ってきた当事者たちは何を 思うのか。

Relight Project に対する総括とプロジェクトをやってきた ことで見えてきたそれぞれの「これから」。

ことの始まりは一通の メールからだった

菊池宏子

2014年8月20日

ことの始まりは一通のメールからだった。

ザインの視点から再点灯を考える」と題しお話をさせていただい 自分がアーティストだからできることを考えていた。 た。大学の講義が伸びてしまい、ぎりぎりか、若干遅刻で到着した ことを思い出す。当初は、私の活動の中核にあるコミュニティ・エ ンゲージメントの理念や手法を中心に、外部の人間として、「少し 通じてメッセージをいただいた。 でもこの活動に貢献できれば!」と思いながら、プロジェクト成功 に向けた理想を語り、率直な意見を述べさせていただいたと思う。

そして10月28日の会合後、まさか数ヵ月後の2015年から、こ のメールをくれた林曉甫と共に、NPO 法人インビジブルを設立し、 この事業の運営母体として関わることになるとは、想像もしてい なかった。

2015年6月10日

Relight Project が始まって間もないころだった。

宮島達男氏が、「ミヤジマスクール」に呼んでくださり、そこでは、 ら、Relight Projectの運営、特に Relight Committee のディレクショ 「アートスクールを卒業して社会で生き残る」ことをテーマにお話 ンを担ってきた。 させていただいた。本当に久しぶりに美大生のころの作品、前衛的 を一気に紹介する機会となった。

多分このころまでは、コミュニティデザイナーとかエデュケー ターなどの、コーディネーターという肩書きが先行してしまい、多 くの人が、私がアーティストとして教育を受け、活動していること 震災以降の社会にふさわしい形で再点灯することを目指した「光 を知らなかったと思う。Relight Projectの初年度は、肩書きにはこ の蘇生」プロジェクトの勉強会へのお誘いだった。「コミュニティデ だわらず、自分の所在が不明瞭のまま突き進み、心のどこかで常に

2016年、初回「Relight Days」終了後、宮島氏からチャットワークを

(前略) しかし、お前は、今回、期待通りのアートを展開し てくれたな。凄いよおまえは。それはちゃんとアーカイブし、 自分のアート活動としてプレゼンできるようにしておいたほ うがいいぜ。愛知もそうだったけど、形にしないとお前の アートは流れる。人の記憶だけだと限界がある。それでこそ、 お前が震災を期に日本に帰ってきた意味があるってもんだ。

この言葉が私を救い、その後のプロジェクトに対する姿勢や考え方 に多大に影響した。大げさではなく、彼は私のアートの恩人である。 当時は、京都造形芸術大学で教鞭をとり、副学長をなさっていた そして、現在に至るまで、アーティストとしての自覚を持ちなが

東日本大震災がきっかけとなり、仕事の目処もなかったが、生 なパフォーマンスアートから地域コミュニティとの協働プロジェク 活の基盤であったアメリカから、急遽日本に拠点を移す決断をし ト、そして美術館や芸術祭での教育普及活動、ボランティア育成や た。その後は復興のボランティア、そしてフリーランスで活動しつ 人材育成の仕事のことなど、表現方法やアウトプットは多様であれ つ、震災にまつわるプロジェクトに定期的に参画していた。そのよ ど、私がアーティストとして意識をしながら関わったプロジェクト うな状況の中、舞い込んできたのが Relight Project の話だった。 当時すでに震災から4年が経過していた。東京では、「被災地」との

東京にいる日本人として、あの記憶を忘れないためにも、自分を構想・展開をデザインしてきた。 なりの考えや思いを語り継ぎ、行動する責任があると思っていた。 初年度は、コミッティメンバーと共に、プロジェクトの方向性を

2016年1月28日

Relight Session Vol. 2「ソーシャリー・エンゲージド・アート—行 2年目は、社会彫刻家を輩出する市民大学として新たなスター 動するおとこたち一で、東京都港区笄小学校の図工教諭・江原貴美 トを切ることになる。従来のアートの定義や枠組みを超えつつも、 子先生と初めてお会いした。私はモデレーターとして登壇してい アートという世界、思考を介すことで各々が持つ専門性を活かし、 た。最前列、私から向かって一番右端に座っていらっしゃったのが 能動的な学び合いから起きる実践・行動を起すプラットフォーム 江原先生。なぜかすごい存在感があり印象に残っていた。終了後、となった。ここでは常に、自分自身にある固定観念への問いや、個 名刺交換をさせていただいた。このような場では、形式的な立ち 性を最大限に生かせる少人数制の組織=市民大学として活動が始 話程度で終わることが多い中、その年の Relight Days のアクショ まり、今に至る。 ンの企画へのご協力の打診がきっかけとなり、先生との関係は始 しかし、心残りもある。

育んできた活動は私にとっては特別なものとなった。3年目を迎え した活動として、3年という月日ではわからないことだらけだ。 るが、ここで起きたことを、説明するにふさわしい表現、言葉は見

日本大震災を思いながら「花は咲く」を歌っている。

2016年3月3日

のことは、今でも忘れられない。江原先生は、震災後継続的に行っ 核心に迫るところがあると思う。自分自身に問い、自分が社会の中 てきた音楽の活動にも触れながら、Relight Project を学びのテー でどのような位置付けなのか、社会に対して自分なりになにがで マに置き、数字と命の関係、命と声、そして身体へと紐付けながら、 きるのか? この思考を何度もなんども自問自答しながら、一人の 社会におけるアートと道徳、そして人の命を考える「こころの時間 人間として、女性として、アーティストとして、自分のために行動 と題した授業を展開した。生きることの意味、人の心に届けるアーすることこそが、社会彫刻家というあり方なのだと思う。 ト、そしてアートが人のため世の中のためになし得ることを、「教 東日本大震災のこと、そしてプロジェクトのテーマを、アーティ 室 という場所で伝えた。

それぞれの先生の思いを行動に移した。ひとりの先生は、プロジェ を改めて教えられた。日常の当たり前が、はっきりと浮き彫りに クトの参考資料としてお渡しした「3.11は■ている。」のワークシー なった。 トを活用し、3月7日に校内に大きな掲示板を立て、子供達の思い 形あるものはすべて壊れる。だからこそより一層、無形に秘め

3.11が助けを求めている 3.11が命を考えている

3.11 がうたで日本中にうったえている

3.11 がみんなに希望をあたえている

3.11 がたいせつなことをおしえてくれている

子供達はこんなことを綴った。

に届く。 気持ちと行動の連鎖から、私は Relight Project の本質を ジメント」を主軸に、具体的な解決に向ける行動とそれに伴う表現 垣間見ることになった。

あくまでも私が感じたことだが、子供達は、アートとか表現活 動を特別視してはいない。芸術作品を見て感じたことをすぐ言葉 にできたり、自分の気持ちを友達と話すこともアートだと解釈し たり、そしてなにかを感じ、言葉にならないことを、踊ったりしな がら表現し、自分の感性から感想を伝えようとする。また、公立 の先生という立場を超えた教育者として、自分自身のこととして Relight Project の実践者となり、行動なさる先生方の姿にも心打

私たちの手から離れた笄小学校でしかできない独自の活動へと 発展し、江原先生を中心に、校長先生を始め、先生方、そして誰より も児童たちが、プロジェクトの思いを自らの尺度で解釈し、自分た ちの意思でさまざまな行動を起こす。笄小学校の中から湧き出る 何か生命を感じるものが蓄積された。

Relight Committee は、違い・個性を最大限に尊重する学び合 いという「共育の場」と位置づけながら、実社会で経験をもち、職種

物理的及び精神的距離はもとより、日常を生きていく上で、震災後 や経験が違うもの同士が集まり、多世代・多分野で活動する市民 のあの自粛していたころの時間が、まるでなかったかのような実 の集団である。私は、コミュニティ・エンゲージメントという人と の関わり方の概念・実践のアプローチを応用し、コミッティの骨格

それが、震災や災害についてのみ特別なことをするという意識で 舵取りしながら進んでいったが、5年ぶりの再点灯という特別な はなく、自分らしく何か社会にとって前向きな形であの経験を生 ゴールがあったがゆえに、彼らの時間、知恵、労働の大部分がそこ かすということだ。私の場合は、アーティストとして、東京でしか に注がれることになってしまった。アイディアを出すことから実行 できないこと、東京だからこそできることを真摯に考えていた。 まで、そのプロセスでの学びは多くあったとは思うが、どこかでプ ロジェクト全体の大きな目的を見逃してきた気がしてならなかっ た。そんな1年目だったが、当事業の方向性を決める重要な組織体 であったことには間違いない。

社会実装として、3年目にしてやっと見え出したこと、また、社会彫

今言えるのは、"普通の人"と呼ばれる人たちの発想や創造力は 計り知れないということ、彼らが自身を信じ、思いに集中した時、 江原先生は、学校が港区という立地であるからこそ、子供達に どんな著名なアーティストの作品よりも、心に届く素晴らしいも は、できる限り美術館を訪れたり、街にあるパブリックアートを体 の、創造が生まれることを痛感した。特別な人のみがアートに触れ・ 験させたり、有栖川公園へスケッチに行ったりなど、「見る、感じる、 営むのではない。誰しもが備えている能力や役割に意識・誇りを 表現する | 体験を積極的に図工の授業の一環として行っている。ま 持ち、生活・行動することで、よりよい社会を創成することがこの た、音楽の先生を中心に、毎年3月11日には、全校児童朝礼で、東 プロジェクトを経て実感できた。だからこそ、Relight Project とい うフレームの中で、コミッティという仕組みや組織体について、よ り一層深く追求する時間と機会がほしかった。

フランスの哲学者デカルトの「我思うゆえに我あり」という言葉 がある。絶対的な定義など存在しない中、「社会彫刻家」について考 私も参加者のひとりとなり、4年生の児童と共に学んだ初回の授業 えていると、この言葉の意味には「自分自身を問い続ける」という

スト、そして事業を運営する立場から振り返った時、大きな学び この授業を一緒に体験していた担任を持つ先生方が、自発的に のひとつは、物質的なものの儚さであり、人との関わりの大切さ

> られている「何か」を見つけることの大切さ、美しさをアートの 表現・創造として訴える必要があると思っている。ものづくりに よって生まれる文化は、大変重要なことでもあるからこそ、これ からは、今まで以上にアートを制作する意図・意味が求められて

最後になるが、日々の生活の中で、アートは無関係と思って生活 している人は少なくない。だからこそ、アートの解釈の多様化が進 まない限り、いつまでもアートは他人事で終わり、アートへの期待 が薄まって、評価もなくなるという危機感を感じている。関わる者 江原先生の思いが、他の先生方に届き、そして子供達のこころ 全てに、共益をもたらすことを念頭に置く「コミュニティ・エンゲー のバランスを、これからも常に考えながら活動を続けていきたい。

時代との呼応、 柔軟な変化

東日本大震災後の都市とアート

ることを決めた。

プロジェクトへの参加を決めた理由はいくつかある。

形でアップデートするという、その実験的な試みがおもしろそうだことなのだ。 と思ったこと。国内外さまざまなところでパブリックアートを見る とき、その作品が魅力的であればあるほど、作品と鑑賞者の関わり Project で は、「Relight Days」「Relight Committee」「Relight 方をもっとデザインすることで、その作品を通して一人ひとりが何 Session」の3つの活動に取り組み、2016年からは Relight Days と かを考え、誰かと対話することを促せないだろうかと感じていた。 Relight Committee の活動に絞り活動を展開してきた。ただ正直な かを考え、誰かと対話することを促せないだろうかと感じていた。 Relight Committee の活動に絞り活動を展開してきた。ただ正直な 別府)、鳥取藝住祭総合ディレクター(2014,2015, 鳥取)、六本木アーたとえば美術館や国際展などで行われている作品鑑賞プログラムの ところ、やっと形ができたタイミングでプロジェクトがクローズし トナイトプログラムディレクター(2014,2015, 東京)などを務める。 ように、ひとりでは深く考えなくても、複数人で見たり、ナビゲー てしまったという思いが強い ターのような人がいたりすることで作品の見方は変わるはずだ。 Relight Committee については、「社会彫刻家の輩出を目指した 実用性から離れたパブリックアートを見て「なんでここにこんな 市民大学」と位置づけ、そのカリキュラムを更新していく中で徐々 ものがあるんだろうか?」ということを考えることから広がる対 にその中身が整いつつあったタイミングで終了を迎えることに 話や場所への理解、社会への疑問などを広げていくことは、アート なってしまった。また、「Relight Days」については、3日間だけ作 の活用方法としてふさわしいと考えていた。だからこそ「Counter 品が再点灯するというフレームをテンプレートに、東日本大震災で Void」という東京都心にある既存の作品を新しい形で活用するこで放災した地域での展開や、さまざまな自然災害で被災した海外の類 とに対して期待があった。不動産物件のリノベーションのように、似する地域でプロジェクトを展開したいとも考えていたが、実現に 元の躯体を活かした「アートのリノベーション」ともいえるあまり は至らなかった。 馴染みのない取り組みだからだ。

作品の制作に学生ボランティアとして関わり、企画や当日運営だけ 示すことができなかったことが残念でならない。 でなく、映像作品にもちゃっかり出演させてもらった。撮影後に、 「林が映った映像はひどすぎて作品として全く使えない」と言われ アートプロジェクトを介した たものの、その後京都で行われた展覧会のカタログに、自分が映っ コミュニティの必要性 た映像シーンの写真が大々的に使われていて笑ってしまったのを 覚えている。それ以外でも、自分がロンドンにある芸術大学の調査 特にこれから都市で展開されるアートプロジェクトでは、プロジェ 研究員としてイギリスに滞在し、展覧会を企画することになったと クトヘー時的に関わるだけではなく、そのアートプロジェクトをひ きに作品をお借りするなど、色々とお世話になってきた経緯があ とつのコミュニティと捉え、継続的に育んでいく関係性を構築する る。ただ、一緒のプロジェクトに携わったのは、別府が最後というこ ことが求められるだろう。アートという言葉が一般化し、鑑賞機会 ともあり、今回久方ぶりにプロジェクトをご一緒できるというのが は増え続けていく。今後は、さまざまなメディアや SNS を介して体 うれしかった。

なる取り組みを行なってきた。

変化に即し、書き換え続ける

しかし、2015年になってから状況は大きく変わる。3月、諸事情 により『Counter Void』を LED 化して再点灯することを断念。 同 時に運営母体の NPO 法人が継続した運営を行うことが難しいと いうことになり、自分がプロジェクトをそのまま引き取ることに なったのだ。こうしてプロジェクトは大きなターニングポイントを むかえる。プロジェクトを引き受けるにあたり、必要となる NPO

法人インビジブルを菊池宏子と共に立上げ、作品の再点灯という 軸はぶらさずに、より一層自分たちの色合いを出すプロジェクト 2014年夏、Relight Projectの前身の活動「光の蘇生」プロジェクト としてゼロベースで考えなおしていくことになった。少し話がそ の運営メンバーとして関わってほしいと連絡があったのが、このプ れるが、このプロジェクトは常に進行を書き換え続けていくこと ロジェクトに関わるきっかけだった。東日本大震災を機に消灯したの連続であり、「再」という漢字、「Re」という英語は本当によく 『Counter Void - 光の壁 -」を再点灯させるアートプロジェクトを行 使った。内外の状況の変化に合わせ、プロジェクトを調整していく うということで、これまで国内複数の地域でアートプロジェクトの ことはどんなアートプロジェクトでも起こりうることだが、特に 企画・運営に携わってきた経験を買われ声をかけていただいたの 今回はプロジェクトの立ち上がりから、現在に至るまでの変化が だと思っている。最初の会議に招かれ、プロジェクトが立ち上がっ 大きかったように思う。加えてこのプロジェクトは、利用する場 た経緯や、これから考えていることを聞き、プロジェクトに参加す 所が「パブリック」と呼ばれている空間であっても、多くの場合、 Photo: Ryuichi Maruc 企業の所有地であったため、行政との交渉とは違う難しさを覚え ることが多かった。しかし、それこそが東京を始めとした都市部 ひとつ目は、『Counter Void』を東日本大震災後の社会に適したでアートプロジェクトを展開するには引き受けなければならない

2015年4月に「光の蘇生」を引き継ぐ形でスタートした Relight

既存のパブリックアートを、制作したアーティストと市民が協働 ふたつ目は、『Counter Void』の作者である宮島達男さん して新たな社会のシンボルに転用してきた Relight Project。同時 とのプロジェクトであるということ。宮島さんが日本を代表 にその活動は、これからの時代をつくる人々を育成するプログラ する現代アーティストとして国内外で広く知られた存在であ ムとも連携しているという点で、大きな社会性を伴っていた。その ることはもちろん、個人的なことをいえば、大学生の時に自 ことは、『Counter Void』の近くにある小学校が、自主的に Relight 分が初めて関わったアート作品の制作が宮島さんによるもの Project と連携した活動を始めたことにも表れている。そんな意味 のあるアートプロジェクトが日本の首都である東京で行われてい 大分県別府市で制作した《Counter Voice in the Earth》という ることを海外で発表し、日本におけるパブリックアートの現在地を

験を発信・共有する人々と、どのようにして繋がりをつくり、関係 以上のような理由から、『Counter Void』再点灯に向けたプロ を育んで次のアクションを生み出していくかという、アートを軸に ジェクトに携わることを決め、2014年の1年間はさまざまな領域で した循環の仕組みが重要になってくるだろう。どのように繋がり、 このプロジェクトに賛同してくれる人を増やすことを目的とした どのように深化させ、それをバラし、再構築するか。その循環を全 小規模な勉強会の開催や、研究者の開沼博さんに依頼した震災後 て主催者がコントロールするのが不可能なことは明白で、軸となる の福島の現状を知るためのツアー企画など、プロジェクトの基礎と ものをぶらさず足場を固めつつも、むしろ変化に対し柔軟であり 積極的に形を変えていくことこそ、アートプロジェクトを定着させ ていくために必要なことではないだろうか。

> 『Counter Void』の再点灯というテーマからスタートした Relight Project が、作品のコンセプトを尊重しつつも時代との呼応 を模索し続け、それを拡張・変化させ続けたアートプロジェクトと して記憶されるのであれば、プロジェクトに携わった一人としてう れしく思う



林曉甫

(NPO 法人インビジブル マネージングディレクター)

立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。卒業 後、NPO法人 BEPPU PROJECT にて公共空間や商業施設など を利用したアートプロジェクトの企画運営を行い、文化芸術を通じた地域活性化や観光振興に携わる。2015年にNPO inVisible を設立。 別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界2012」事務局長(2012,

それは変化し、関係を結び、 永遠に続く

Void - 光の壁 - 』の電源が落とされた。そして都内広域で計画停電 くの人の手による復活 (再制作) の方法を探るプロジェクトでいけ が実施された翌14日以降、今日にいたるまで乳白色のガラスの壁 るのではないかと考えた。それ以前にアーティスト・川俣正と展開 としてひっそりとその場にあり続けてきた。

NPO 法人インビジブルによる Relight Project での一番の功績 勉強会から始めていた。その事業枠の後継事業としての可能性を は、再点灯のタイミングを逸していた『Counter Void』を、震災か 考えていた私は、宮島とのプロジェクトを勉強会からスタートする ら5年ぶりの2016年春に再点灯させたことだろう。パブリックアー ことにした。 ト作品としてはなにも新しくせず、時を経て割れたり汚れたりし た状態のまま。ディスプレイ部分のネオン管に電気を流すスイッ 「Tokyo Art Research Lab」の研究の一環と位置づけ、勉強会と チを ON にしただけだ。実は可視化がされていなかっただけで、 して、NPO 法人アーツイニシアティブトウキョウ (AIT) に運営を 『Counter Void』の心臓部は設置された日以来、カウントし続けて 委託し、7月から3月までに7回の公開講座を開催。芸術作品の「所 いる。時の風化というべきか。消したことの意味が希薄になり始め 有」「継承」「蘇生」の社会的意義の知見を学ぶため、各面で活躍す た時期故に、再点灯することで意味を逆照射する。その再点灯の期 る講師陣を招聘した。一方で構想するプロジェクトの実現に向けて

本大震災を追悼し、記憶の風化を抑える。そんな蘇生プロジェクト しあい、出会い、話したのが2年目の活動の実態だったと思う。 のアイデアだった。そうしたプランをネガポジ反転させたような、 トの実質的な成果だと私は考える。

から「Counter Void」を活用したアートプロジェクトへとその姿を アート作品「Counter Void」を、東日本大震災後の日本社会におい 変えた。その試みが2018年3月をもって終了する。想定よりも終 て社会的意義のある形で再点灯を目指す。25年度に、Tokyo Art わりが少し早かったが、『Counter Void』と関わり、このようなプ Research Lab において現代美術作品の修復、再生について研究会 ロジェクト展開をできたことには感謝している。そうでなければ を重ね、26年度より多様な人々の共感のもとにそれらを可能にす 2013年から思考することもかなわず、NPO法人インビジブルの るための仕組みつくりに着手する | とある。そのひとつ目が六本木 誕生も Relight Projectの活動も生まれることがなかっただろう。 アートナイト開催初日となる4月19日に実施したトークイベント 事業を構想し、きっかけを生み出したディレクターとして、Relight 「「光の蘇生」プロジェクト予告篇~《Counter Void》再生をめぐっ Project 前の活動を振り返っておきたい。実はプロジェクト始動前 て〜」だった。3.11後の日本社会においてどのような姿で再生さ には3年間弱の準備期間があった。発端は、私が2012年に宮島達男 れるべきかを茂木健一郎(脳科学者)をゲストに宮島達男が対談し のアトリエを訪問したことだ。

「光の蘇生」から「光の学校」構想へ

舞台は六本木から茨城県守谷へ、時は2012年度末。前職の水戸 芸術館勤務時代に個展の企画でお世話になった宮島達男のアトリ エを訪ねた。 当時はまだ東京文化発信プロジェクト室 (アーツカウ ンシル東京に2015年に統合)と称していた移籍先で、2013年度か ら都内で展開するアートプロジェクトの依頼のためだ。

「なぜ、宮島達男なのか」。

理由は明快だった。宮島達男は、1~9の数字をカウントするデ ジタルガジェットを使った作品により世界のアートシーンの寵児で ありながら、長崎の被爆柿の木2世の里親を求める「時の蘇生・柿 の木プロジェクト」を1995年から展開し、地球規模で主宰し続け る活動を行っている。参加型アートプロジェクトを既に継続実施し てきた作家として、「東京アートポイント計画」で新たな事業を依 交差点に位置した『Counter Void』だったことは象徴的だ。プロジェ 頼したいと思ったのだ。それに加え、まだ知り得てないアートプロ クトとして多くの経験をし、プロジェクトそのものが進行形の中で ジェクトの新しい展開方法を編み出したいという野心に近い思惑 育ち拡充していった。計画執行型ではないフラジャイルな進行、コ

の『Counter Void』が消えている。 再点灯のタイミングが難しくて」 回答は難しいが、東京都現代美術館に収蔵されている宮島による と口にした。2011年3月14日から都内で大規模な計画停電がある 作品のタイトルが、我々になにかしらの示唆を与えてくれているよ (実際に実施された)とのニュースが流れた、その前日の13日に、作うに思う。 家として「消灯」する決断をして、その後、一度も再点灯をしていな 『それは変化しつづける それはあらゆるものと関係を結ぶ そ いという。初耳だった。それを聞いた当時の自分は、「再生」と宮島れは永遠に続く」だ。

2011年3月13日、作家の意志で、名実ともに輝いていた「Counter 作品のタイトル「蘇生」を想起しつつ、再点灯のきっかけとして、多 した「東京インプログレス」というアートプロジェクトもリサーチと

事業初年度となる2013年度は、東京アートポイント計画内の チームビルディングも急務だった。会議に参加した宮島達男とはス Relight Project による再点灯から遡ること3年前。2013年当初、カウトするメンバーについて常に話題にしていた。そうして加わっ 私自身が立ち上げた『Counter Void』の蘇生計画は、真逆のもの たのが、グラフィックデザイナーの長嶋りかこだ。メンバーとなった だった。Relight Project という事業も NPO 法人インビジブルも誕 後は2014年に「光の蘇生」から「光の学校」 構想へという、プロジェ 生する前のことだ。当時考えていたのは、作品を構成するネオン管クトの展開の方向性を構想し、構造的にデザインした。さらにその を LED 照明システムに交換し、割れたガラスや乳白色の遮光フィ 後、林曉甫、菊池宏子といったメンバーが参画。2人はその後2015 ルムを新たにすること。総額1億円ほどかかるそれらの修繕費用を 年からの活動を担う NPO 法人インビジブルを設立して、中心的メ クラウドファンディングや寄付で集め、完璧な再生をした上で再点 ンバーとして牽引してくれるようになった。 奇跡的と言っていい。 灯する。その上で3月11日から13日の3日間だけ逆に消灯し、東日 チームを構成するために、各分野で必要と思われる人材を自薦他薦

2014年度には、アートポイント計画の事業枠へ移行し、【「光の Relight Project による3日間だけの再点灯は工夫の産物であり、逆 蘇生 | プロジェクト - 《Counter Void》再生をめぐって】という名 転の発想によるものだ。この転換を導いた思考こそが本プロジェク 称で、アートプロジェクトとしての活動をはじめた。報告書の事業 趣旨には「平成23年(2011年)3月13日に消灯した六本木・けや こうして Relight Project は、『Counter Void』そのものの蘇生 き坂に常設されているアーティスト・宮島達男によるパブリック た。プロジェクトの広報効果を狙い、プロジェクトの賛意表明とし て『Counter Void』に自由にステッカーを貼るワークショップを実 施し、約810人の参加者を得た。

「光の蘇生勉強会」は現場メンバーがアクションをとるための相 互の学びを目的として全5回開催し、再点灯に向けて必要となる各 分野の考え方や手法を習得することを目的に講師を招聘した。長 嶋りかこや菊池宏子も講師を務め、合宿のような会議の場を経て、 徐々に、私や宮島の意見ではなく、彼らの考えを中心に方向性が決 められる体制が生まれていった。その完成を象徴するのが、2015 年に始動した Relight Project としての Relight Days (3日間だけ の再点灯)の発案だった。

けやき坂で交錯した偶然と必然

偶然と必然が人と人を結びつけたクロスポイントがけやき坂の レクティブな運営。新しいなにかを求め生み出したい気持ちで進 しばらくやり取りをした後、宮島は「六本木のテレビ朝日の社屋 めていたプロジェクトだった。ではその成果とはなにだったのか?



(アーツカウンシル東京 東京アートポイント計画ディレクター)

1960年愛知県生まれ、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカ ウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京アートポイント計画の 立ち上げから関わり、ディレクターとして NPO 等と協働したアートプロジェクトの実施、人材育成プログラム「Tokyo Art Research Lab | などを手がける。2011年7月より「Art Support Tohoku Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)」の ディレクター、2015年よりリーディングプロジェクトディレクタ-も務める。

Ways to End Public Art by Relight Project 1: Reflection - 省察 -

Relight Project

桜井祐 (TISSUE Inc.) 室内直美 (NPO 法人インビジブル)

アートディレクション

長嶋りかこ (village®)

グラフィックデザイン 真崎嶺、岡崎真理子 (village®)

丸尾隆一

印刷 グラフィック、繁岡美術

発行日 2018年3月11日

アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28九段ファーストプレイス8階

TEL: 03-6256-8435 / FAX: 03-6256-8829

URL: www.artscouncil-tokyo.jp

本書に関するお問合せ先

NPO 法人インビジブル 〒103-0012

東京都中央区日本橋堀留町2-4-5 長谷川ビル5階

TEL: 050-3710-8483 / E-mail: info@invisible.tokyo

URL: invisible.tokyo

禁無断転載・複製

© 2018 ARTS COUNCIL TOKYO All Rights Reserved.

Printed in Japan

Relight Project

主催 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財 団)、NPO 法人インビジブル URL: http://relight-project.org

リライトプロジェクトは、「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPOを育成します。

www.artscouncil-tokyo.jp